

Society for Promotion of Space Science

公益  
財団法人 宇宙科学振興会

# 30年の歩み



「(C) 宇宙航空研究開発機構 (JAXA)」

# Contents

---

創立30周年を迎えて .....	3
------------------	---

## 01. 概要・沿革

公益財団法人 宇宙科学振興会の概要 .....	10
沿革 .....	10
基本財産 .....	10
出捐企業・団体 .....	11
賛助会員 .....	11

## 02. 助成・支援事業

宇宙科学奨励賞 .....	12
若手・シニア国際学会出席旅費支援 .....	16
宇宙科学に関する国際学会開催支援 .....	20
宇宙科学に関する一般支援助成 .....	24

## 03. 財団の現在の組織

組織図 .....	26
役員（理事・監事）名簿 .....	26
評議員会名簿 .....	27
研究助成審査委員会名簿 .....	27
宇宙科学奨励賞選考委員会名簿 .....	28
運営委員会名簿 .....	28
顧問名簿 .....	29
歴代理事長・常務理事・事務局長一覧 .....	29

---

# 創立30周年を迎えて

## 宇宙科学振興会設立三十周年に際して

理事長 松尾 弘毅



当財団もお蔭をもちまして創設三十年を迎える運びとなりました。慢性の低金利に急性のコロナ禍と、申し分ない逆境にありますが、役員一同気力は衰えておりません。今後とも皆さまのご支援をお願いいたします。

そもそも私が理事長をお引き受けすることになったのは、西村、長瀬両先生に目を付けられたからで、いわばやくざと目が合ったようなものです。私の方の動機には、名刺に載せる肩書として品が良いというのがありました（「無給」と念を押すとさすがに品がなくなりましょうが）。

三十年前の設立時には私はあまりお役に立っていません。ただ、動機について身近に感じていたのは、性悪説に立っているかのような、外国旅費の窮屈さでした。当時の制度ではプロジェクト費用からの支出ができず四苦八苦していました。或る篤志家の女性から三千万円の寄付を受け、これでいかに多くの職員が海外研修に行けたことか。このような状況は徐々に解消されましたが、本財団の活動にもその後継活動があります。もう一つの柱である宇宙科

学奨励賞については、この賞の受賞を契機にさらに飛躍した、などと言う評価を推薦者からいただくのは、嬉しいことです。ただ、審査委員会に陪席するのは、疲れ果てるので苦手です。

産業界から基金を集めるについて、私も同級の友人に電話しました。「幾ら」と訊かれ「うん百万」と言うとあっさり「いいよ」言われて、後悔しました。なんで倍にしておかなかったのか。それにしても倍なので、所詮気が小さいのでしょうか。

私にとっては長い空白の後、公益財団法人化された本会の理事長に就任し、小野田常務理事、佐々木事務局長の強力な体制に支えられて何とか任を果たしています。特に、佐々木宇宙研名誉教授を引き込んだことは、長瀬前常務理事の最大の功績だと思っています。

## 創立30年を迎えて

評議員会長 ソニー株式会社 社友 森尾 稔



財団法人 宇宙科学振興会が創立30周年を迎えられた事を心よりお祝い申し上げますと共に今まで日本の宇宙科学の発展に貢献された多くの方々に心より敬意を表します。私自身は宇宙科学の門外漢で有りますが2005年から2011年までの6年間、宇宙開発委員を拝命し、委員長であった松尾弘毅先生とのご縁で当財団の評議員を仰せつかっております。

当時の宇宙開発委員会は文部科学大臣に直属の委員会であり、日本の宇宙科学技術は、「衛星・ロケットの開発」から「課題解決の手段としての宇宙利用・推進」へと発展する過渡期であったと思います。

宇宙利用は総務省、国土交通省、経済産業省等、でも進んでおりました。渡海文科省大臣の時に委員会メンバーと大臣との懇談会が有り、その席上で「宇宙開発委員会が国の宇宙政策を議論するのであれば、委員会は文科省の管轄ではなく省庁の枠を超えた内閣府でなければおかしい」と発言して、文科省の事務当局から響感を買った事もありました。

その後2008年には宇宙基本法が制定され、内閣府に内閣総理大臣を本部長とする宇宙戦略本部が設置されました。宇宙開発委員会は発展的に解消され、機能は宇宙政策委員会に移行しました。渡海文科大臣の大英断であったと思います。

また当時の日本の宇宙利用は非軍事利用に限定されており、各国が宇宙は平和利用に限ると言いながら一定の軍事利用、例えば平和を守るための軍事情報収集衛星なども行っている中、日本は異端の存在でした。

こうした日本の宇宙科学を取り巻く環境の変化の中で、宇宙科

学振興会が一貫して果たしてこられた、「宇宙科学に関する事業への援助及び研究助成」という役割は日本の宇宙科学の極めて高いレベルの維持に多に貢献してきたと言えます。

支援事業の中でも特に宇宙科学奨励賞顕彰事業は37歳以下の若手研究者を顕彰するところに特徴が有ると思われま。それは授賞理由にも良く表れています。受賞者の優秀な業績に対して授賞される訳ですが授賞理由には必ずと言っていいくらい次の様な文言が入っています。

「今後も宇宙科学を牽引し、大きな貢献をする研究者となることを明確に示している。」

「今後も我が国の宇宙工学の発展にリーダーシップを持って貢献してゆく研究者となることが期待される。」

つまり現在までの業績評価にとどまらず将来の可能性まで含めて顕彰しているわけです。こうした事が長年積み重ねられた結果として、宇宙科学に関わる人達（宇宙邑）の年代を超えた強い絆が出来たものと思います。毎回、受賞者の講演会での質疑応答、或いはその後のパーティでの会話などを聞いてその様な雰囲気を感じていました。私が宇宙科学の門外漢として常に羨ましく思うのはこの宇宙邑の年代を超えた連帯感であり、絆の強さです。

この醸成に宇宙科学振興会が一翼を担っている事は明らかです。今後とも当財団の支援事業が日本の科学技術の発展に貢献し、また宇宙に関わる人達の絆が一層深まる事を祈念しております。

# 宇宙科学振興会発足の頃

宇宙科学振興会顧問 西村 純



宇宙科学振興会が作られた1990年の頃は経済情勢は少し衰えて来ていたが、グローバル化が進んだ時期であった。宇宙科学研究所について言えば成果が上がり始め、国際共同研究の話が幾つか出てきた。国内の会議と同じように、また来週ワシントンで相談しようという事が屢々起きようになってきたが、外国に出掛けるのは国内に比べて、まだ特別に扱われていた時代であった。

文部省や大蔵省もこのような事情は承知していて、便宜を図ってくれたが、大元の規則が新しい体制にマッチしていないので、配慮できる事には自ずから限りがあった。

もっとフレキシブルに対応できる財団があればという希望が高まり、企業側では日電の黒田さん、日産の川島さんら、宇宙研の事務局長の余米さんが相談して、財団設立の可能性について検討して下さい。初代会長の日電の社長の関本さんが肩入れして下さい。初代会長の日電の社長の関本さんが肩入れして下さい。初代会長の日電の社長の関本さんが肩入れして下さい。

当時は新しい財団を作ることは現在ほど容易ではなかったが、宇宙科学研究所の前身である航空研究所には戦時中「朝日新聞」の寄付による航空関係のポスドクを支える財団が存在していた。戦後、この財団を消滅させるという動きがあったが、知恵のある人がいて将来財団が必要になった時まで休眠財団にすることを勧めてくれた。休眠財団の議長の福井伸二先生に新しい財団のお願いに上がると、是非有効に生かしてくれと励まして下さった。

財団が発足して、議論を詰めてゆくと、「賠償放棄」の問題で行き詰まった。国際協力実験を行うに当たって、事故などで観測器、人員に損傷があった時、その賠償を放棄するという合意がなければ、共同実験は行えないとNASAがいうのである。専門

家によると、国際法の依って立つ基盤には二つの大きな流れがあってアメリカはアングロサクソン法、日本はゲルマン法に基づいている。一部を変更すると全体に響く。宇宙研は国家機関であるので賠償は国が支払うというゲルマン法に従っている。

これではいくら議論しても埒が明かないわけである。関係省庁とも相談して唯一の解は財団が自動車保険のように保険をかけておく案しか有るまいということになった。(現在では宇宙研は国家機関ではないのでこの縛りはない。)保険方式については日米政府間の正式な交換文書に明記して、賠償問題を解決することができた。宇宙研が行った初期の国際協力実験のぎんが、あけぼの、ようこう、Geotail、あすか、スペースフライヤーユニット、はるか、すざく等々は財団なしには日の目を見なかった事になる。これらの国際協力の成果で、宇宙研が国際的に高く認知されるようになった事を思うと、財団の果たした役割が如何に大きかったか思い知らされる。

財団のその後の活動についてはこの30周年の纏めにも詳しいが、比較的規模の小さい財団で将来の発展を見通して効率よく運用されて来たのは素晴らしいことである。

現在は、国際的にも経済情勢が悪く、財団の運営は苦しい時期を迎えているが、これを乗り越えて、財団の成果を生かして行きたい。

設立に尽力された方々と、財団の運営に力を注いでこられた各委員のお陰であると感謝の念をささげ、今後の発展を見守って行きたいと思う。

# 振興会 30 周年に寄せて

元宇宙科学研究所長 秋葉 鏢二郎



コロナ自粛の最中投稿のおすすめを受けました。参考までにとお送りくださった20周年記念パンフを一読しこの10年の時の流れの激しさを痛感しました。それは自然災害の10年ともいえます。そもそも、この財団は宇宙科学推進における経済上の自由度を拡大するために設立されました。その意味でこの10年の経済状況は厳しさを増し、財団の運営にも暗い陰を落としているようで、このところの活動に本来のおおらかさが失われてしまったのは残念というほかありません。いまのコロナウイルス禍COVID-19は天然災害です。世界中がその対策に懸命です。最大の経済危機とも言われています。お金のことを根本から問い直すときです。そもそも今の経済システムでは知識の生産母体である研究や教育に潤沢な資金を循環できていないのです。現状の混乱は金がないのではなくその使い方が間違っているためです。困みに政府日銀は赤字国債にたよって今の国家予算を維持しているのですが、それは毎年の税収が頭打ちの結果です。支出した金は消え失せるはずがありません。必要なところに循環していないのです。この度未知のウイルス対策の主役は世界中の科学者でした。我が国で科学という言葉は極めて限定された意味でつかわれるようになりましたが、福澤諭吉の「学問のすすめ」における実学にはルビにサイエンスと書かれています。つまり、西欧における科学はまさに実学でした。もともと知識産業を創出する母体は、研究や教育です。日本における基本的認識の錯誤の結果、経済優先の政策の下科学技術政策がゆがめられ研究開発費が圧縮され、その現場は疲弊しています。宇宙科学分野の一財団では

もはやこの事態を改善できるわけがありません。皆様、この春政府の一律10万円支給を受けた記憶は鮮明でしょう。このような社会保障がさら進むと国家予算の殆どをそれに宛てることになりいわゆるベーシックインカム制度の導入となります。その場合公益性のある経費をどのように捻出するかを考察するとき、貨幣についての概念の転換が求められます。これは近代通貨理論MMTに基づく財政です。ベーシックインカム制度に詳しい駒澤大学の小川智洋准教授は2階建ての通貨システムを提唱されています。わたしは、この2階部分を地域通貨とするのが合理的と考えています。地域通貨は特定の地域のみで使用できる通貨です。多くの社会保障を受ける側の人々は基本的に地域で消費する方々ですのでほとんど地域通貨で生活できますから、一旦支給された社会保障費を地方が吸い上げ別途再循環できます。それに、地域経済として貨幣の利用に制限や特典を用意できます。たとえば、地域の地下資源や不動産売買に地域通貨の使用を義務付けられます。こうすれば、各地域間の相互乗り入れでこの制度がますます活性化できるはずです。そのようにして利用できる資金を研究教育費に割り当てることが可能となります。要はそれで国民の富が増えればいいのです。そこで、今財団の果たすべき役割はこのような現状をどのように改善すべきかについて積極的に発信し関与することではないでしょうか？

# 創立30周年のお祝い

JAXA 宇宙科学研究所長 國中 均



財団法人宇宙科学振興会が創立30周年を迎えられまして、たいへんおめでとうございます。

2003年のJAXA統合から早くも17年、宇宙科学研究所を取り巻く環境は激しく大きく変化する中にありましても、宇宙科学振興会が連綿と宇宙理工学の進展にご寄与いただいていることに感謝申し上げます。これまでにご支援いただいた多くの若人は、学術界のみならず行政府や産業界へと羽ばたき、各組織の要となって呼応しあい、宇宙研究開発や利用を産官学一体となって推し進めています。宇宙理工学の成果発信や将来構想立案のために開催される国際会議やシンポジウムへもご支弁いただき、誠にありがとうございます。宇宙活動が日本を基軸に世界を先導して進められていること、日本の産業力/技術力にも貢献する様を垣間見るにつけ、宇宙研所長として嬉しく頼もしく感じています。また、人生100歳の時代を迎え、シニア研究者はますますお元気で各方面にて活躍されており、宇宙科学振興会からこういった方面にもご支援いただき、共感しております。

直近の10年間を顧みますと、「はやぶさ」の地球帰還、「あかつき」・IKAROS・「あらせ」・「ひさき」・「はやぶさ2」・「みお」・観測ロケット・大気球の打上げなどが実行されました。2010年「はやぶさ」の地球帰還が、2011年東日本大震災に打ち拉げられる日本に少しだけ勇気を与えることができました。忘れてならないのは、2016年のASTRO-Hの喪失です。性能を追求し観測を優先する余り、安全性・信頼性に対する意識が不足であったとの反省を踏まえて、JAXA業務改革がまとめられました。

その方針に準拠して、今現在XRISM・SLIM・JUICE・MMX・DESTINY+の開発を進行させていることを特筆しなければなりません。2000年代以前はX線宇宙天文が主力であったのに対して、2010年代に入りますと波長領域を拡大、また多波長を連携させた「波長統合した宇宙天文観測網」への胎動が感じられるようになります。さらには水星から土星まで各天体に探査機を配置して、「深宇宙探査船団」を組んで太陽系46億年の進化と生命の起源に迫る活動が勃興します。そして今年2020年暮、「はやぶさ2」地球帰還を必ず成功させ、コロナ禍/オリンピック・パラリンピック延期に鬱ぐ世界に、再び元気を届けたいと考えています。東大航空研究所から始まり東大宇宙航空研究所を経て宇宙科学研究所そしてJAXA宇宙科学研究所に至る沿革の中、飛行機・観測ロケット・輸送ロケット・衛星・探査機と常に新たな領域に挑戦して参りました。今後も次のBlue Oceanへの進出を目論んでいます。こういった活動を通して、若人が宇宙理工学分野に興味を抱き人材糾合して切磋琢磨し、ゆくゆくは日本の国力に資することを促す中核機関として宇宙研が機能することを標榜しています。

宇宙理工学の健全な発展には、宇宙科学振興会から未来を背負う若人への公平で安定した研究助成や表彰が不可欠です。引き続きのご支援を賜りたく、よろしく願いいたします。

## 宇宙科学振興会 30周年に寄せて

元理事長 武井 俊文



宇宙科学振興会は航空奨学会を改組して1990年に「宇宙科学に関する研究の助成などを行い、もって宇宙科学の進展に寄与すること」を目的として設立されました。53社からの貴重な出捐金を基本財産とし、その運用益と賛助会員費を原資に活動を行ってまいりました。今年、その宇宙科学振興会が30周年を迎えられたことを、2000年から12年間理事長としてその運営に係わった者として、心からお祝い申し上げます。

2010年に「宇宙科学振興会20年の歩み」が発行されて、早いものでもう10年が経過しました。当時を振り返れば、公益法人制度改革関連3法の施行に伴い、宇宙科学振興会としては、公益法人の道を選ぶか、一般財団法人の道を選ぶかの判断を迫られた時期でした。議論の末、宇宙科学振興会は、公益財団法人を目指すべきとの判断に至り、公益認定取得に向けて検討を始めていた頃でした。そして当時の鶴田常務理事、長瀬事務局長をはじめとする方々のご努力のお陰で、2012年には無事認定を受け、公益財団法人宇宙科学振興会に衣替えを完了することができました。新宇宙科学振興会は、その後も「宇宙科学(宇宙理学、宇宙工学を含む)に関する事業への援助及び研究助成などを行い、もって宇宙科学の進展に寄与することにより、宇宙に対する人類の理解を深めることに貢献することを目的に」、ますます精力的に、宇宙科学の発展に大きな貢献を重ねてこられました。

公益財団法人宇宙科学振興会はその定款に謳う通り(1)若手・シニア研究者の国際学会出席支援事業、(2)宇宙科学に関する国際学会の日本国内での開催の支援事業、(3)若手研究者

に対する宇宙科学奨励賞事業の3大事業により、宇宙航空研究開発機構(JAXA)を中核とする日本の大学・研究機関・企業における宇宙科学研究を振興することであり、このうち(3)は私の在任中の2008年から宇宙科学振興会の看板事業として始めたもので、既に21名の若手研究者を顕彰しています。その受賞者の方々は、その後期待通り各方面で活躍をつづけ、大きく成長されていると聞いております。このように将来の宇宙科学を牽引すると期待される若手研究者の顕彰事業が、確実に成果を上げていることは、当財団の(1)国際学会出席支援事業、(2)国際会議開催支援事業と相まって、日本における宇宙開発利用、宇宙科学研究の後継者育成の一助になっていることは誠に喜ばしいことでもあります。

基本財産の運用益を原資として運営を行う公益財団法人にとっては大変厳しい昨今の経済状況が続く、宇宙科学振興会もその運用益の減少に苦しんでいると聞いています。かつてリーマンショックの際にも財団の資産の保全に苦慮し、低金利経済の長期化による長期にわたる財団の運用益の減少に苦しみました。加えて昨今の新型コロナウィルス蔓延により経済の一層の停滞が予想される厳しい事態となっていることを心配します。後進の皆さまには宇宙科学振興会の目的の達成に向けて、これからも一層知恵を絞りながら事業を推し進めて頂き、宇宙科学振興会を実り多い財団として頂くことを切に願っています。

# 宇宙科学振興会創立 30 周年に寄せて

前常務理事 長瀬 文昭



旧財団法人宇宙科学振興会がまもなく創立 20 年を迎える頃、常務理事兼事務局長としてこの財団の設立その後の運営の中心となっておられた西村先生に、常務理事を引き継いでもらう鶴田先生を事務局長として手伝ってもらいたいと相談を受け、これを引き受けた。その後鶴田先生が体調を崩され、途中から常務理事を兼任することになった。

その後創立 30 年の少し前に常務理事を退任するまでの間に、日常的な財団運営業務に加えて起こった主要な事柄は、①若手奨励賞の顕彰事業を立ち上げ、②リーマンショックに伴う金融の低迷、③財団法人法の改正に伴う旧財団法人宇宙科学振興会を公益財団法人に移行すること、などであった。

この内、若手奨励賞の顕彰事業は公益財団法人に移行後の宇宙科学振興会の目玉事業となったが、この事業の企画は既に西村先生が腹案を温めておられたもので、次世代の宇宙科学・宇宙開発の中心となる人材の育成と宇宙科学分野の成果の高揚がその設立のねらいであった。

リーマンショックに伴う株価の暴落とその後の金融不況は当財団にも多大な影響を及ぼした。当財団は民間企業からの寄付金で設立され、その資産の運用による果実で運営されていたので、もともと小規模な当財団ではその運用益の減少はたちまち事業の継続に困難を来とし、以後大変苦労した。

公益財団法人への移行は平成 20 年に法人制度改革関連 3 法の施行の伴うもので、この改革で公益法人と一般法人の選択が可能となり、公益財団法人へ移行する場合はその法人は内閣府

の管轄下に入り、その厳しい審査、監督を受ける代わりにその保有する資産は無税とされる。当財団は公益財団法人に移行することとし、5 年の猶予期間のうちに移行申請すべく準備を始め、移行の申請書は 5 年の猶予期間の半ばに提出した。その後公益財団法人への移行は平成 24 年に認可され、平成 24 年 4 月 1 日付けで法務局の移行登記が完了し、以降当宇宙科学振興会は公益財団法人に衣替えして再出発することになった。

移行前の旧財団法人では、宇宙科学奨励賞顕彰事業、国際会議出張支援事業、国内での国際会議主催事業の支援に加えて、特別事業として宇宙科学プロジェクト関連の宇宙教育グッズ（衛星、ロケットのモデル、宇宙科学関連ビデオ・DVD など）のネットを利用した有償頒布を行っていたが、諸般の事情を勘案して移行時にこの特別事業は廃止した。

一方、移行後に第 4 の事業として、鶴田常務理事の発案により電子ブックによる宇宙科学テキストの出版事業を検討していた。これについては、まずは財団の運営予算内で試行して、円滑に推進できる見通しが立った際には、これを公益目的事業に加えることとしたが、残念ながらいまだ実現に至らない。

本年は創立 30 周年を迎えたが、金融状況の更なる悪化もあり、財団運営も一層困難な状況にあります。皆様の英知を結集してこの困難を克服し、当財団が今後とも宇宙科学を担う人材の育成と宇宙開発・宇宙科学の発展に寄与されることを願っています。

## 創立 30 周年を迎えて

前研究助成審査委員会委員長 荒川 義博



公益財団法人宇宙科学振興会が創立 30 周年を迎えられたことについて心より喜び申し上げます。この間、宇宙科学振興会は事業の柱のひとつとして宇宙科学に関する国際学会開催の支援事業と国際学会出席旅費支援事業を行ってきております。前者は宇宙理学・宇宙工学を含む宇宙科学分野の日本国内での開催を主催する組織・団体に財政支援する事業で創立当初より行われてきました。後者は宇宙科学分野に関する独創的・先駆的な研究活動を行っている 35 歳以下の優れた若手研究者に対して海外で開催される国際会議・研究集会に出席する費用の支援が平成 9 年から行われてきました。また平成 18 年から、大学や研究機関を退職された後でも研究を継続されているシニア研究者に対しても同様の支援が行われてきております。

上記の事業に関わる組織として研究助成審査会がありますが、私はその委員長として過去 6 年間従事してきました。この審査会は年 2 回の応募締め切りを設定する応募型事業で宇宙理学・宇宙工学の広範囲に亘る分野から理事会によって任命された 7 名の審査委員で構成され、約 2 週間という短期間で応募書類を目を通して審査し、選考結果を委員長が取りまとめて理事会に提出するというものです。応募書類は 1 件につき、10～20 頁ほど、1 回に 20～30 件がありますので査読にはかなりの時間を要し、特に現役の先生方は時間のやり繰りの面でもご苦労が多かったと推察いたします。これも特に若い研究者にとって国際学会での発表が非常に有意義な経験であることから支援したいとの思いから迅速な審査に快く応えて下さったのではないかと考えます。

最近新型コロナウイルス感染拡大防止の観点からテレワークの比率が高まっておりますが、本審査会は従前から基本的にはテレワークの形で行っております。審査委員の方には首都圏だけでな

く、中部、近畿方面に在住の方もおられましたので、限られた短い期間に一堂に会することは極めて困難であり、これが唯一の方法でもあったと思います。この方法でも審査委員、事務局の方々のご尽力があって特に支障をきたすこともなく選考出来たと感謝しております。

評価・選考というものは一般に難しくかつ厳しいもので、特に若手研究者の場合には複数の共同研究者がいるグループの一環として行われた研究成果であることや、あるいは教授・准教授等からの指導で得られた研究成果など本人がどれだけ主導的な役割を果たしてきたかを判断することは難しいものです。こうしたことから、数年前から応募書類の中に応募者の果たした役割分担を明示する項目が設けられました。また審査委員によっては大きく評価が分かれる場合もありましたが、幸いにして 7 名という比較的大人数でしたので予め定めた基準での集計により客観的評価が得られたものと考えております。

過去 6 年間の国際学会開催支援の採択件数は年 3～4 件、若手・シニア国際学会出席旅費支援の採択件数は年 6～11 件と予算上の理由からそれ以前に較べて厳しくなっておりますが、これまで助成した若手研究者の多くが現在の宇宙科学研究の中心的人材として活躍されていることから、今後も宇宙科学の進展に大いに寄与するものと考えられます。

創立 30 周年を迎えるにあたり、この事業の意義を改めて認識すると共に、本事業の継続が益々宇宙科学の発展と科学技術の貢献に資するものと確信しております。

# 宇宙科学振興会 30 周年に寄せて

宇宙科学奨励賞選考委員会委員長 井上 一



宇宙科学振興会創設 30 周年を記念し、宇宙科学奨励賞について最近思ったことを述べさせていただきます。

この 2020 年度前期、母校の大学院で 7～8 年ぶりかで講義を依頼されました。比較的軽い気持ちで引き受けたところ、コロナ禍で、オンライン講義とやらを初体験させられることとなりました。これまでの講義であれば、メモ程度の準備でも、その場で考えながら白板に書いていくことができました。しかし、オンライン講義ではそうはいかず、毎週毎週、およそ 100 分の表示資料を事前にきっちり用意することが必要となりました。講義は、自宅寝室の一隅に閉じこもり、約 100 分間ひたすらパソコン相手にしゃべるという何とも味気ないものでしたが、毎回、20 人近い院生が参加してくれ、有益だったとのコメントももらいました。苦勞の甲斐はあったと思っています。

さて、このオンライン講義のおかげで、自分がこれまでしてきた研究を振り返り、その研究分野の発展について、とてもよく整理することができました。そして、その中で思い知らされたことは、自分が研究してきたテーマや考え方・手法は、20 代から 30 代前半くらいの間にきっかけを得たものがほとんどだということです。私は、宇宙の生まれや成り立ちの解明に挑戦したいと思い、大学院に進学しました。折しも、X 線天文学の黎明期で、私もその新しい分野におおいに興味を覚え、X 線天体について自分なりにいろいろと考察を巡らすようになりました。そして、奇しくも、当時の東大宇宙航空研究所に職を得ることとなり、X 線天文衛星の開発とそれを使った X 線天体の観測的研究に長く関わることとなりました。当時は、人工衛星そのものが研究開発段階で、開発の途中や軌道上でいくつもの不可思議なトラブルが起き、

解くべき物理の応用問題がそこら中にあるような状況でした。それらは、われわれに、自分で問題点を考え、自分の手で解決策を探すことを強い、とてもいい訓練の場を与えてくれました。私のやってきた研究は、結局は、大学院生時代に会った X 線天体についてのものであり、初期の X 線天文衛星開発時に会ったいくつものトラブル解決の努力が血となり肉となってきたものです。このように自分の来し方を振り返ってみると、研究者にとって、20 代後半から 30 代前半くらいの時期は、それぞれの研究者の基礎を作るとても大事な時期であると、今更ながら強く思います。この時期に、できる限り、自分で問題点を見出し、自分の頭で解決策を探し出す努力をたくさん重ねることがとても大事なことです。私の若い時とくらべて、いろいろな研究の最前線がむずかしくなり、実験や観測も手作りに近い形で進めることは容易でなくなりました。しかし、時代とともに形はかわっても、個人の創意・工夫が研究の最前線を切り拓くことには変わりはありません。ここ数年、宇宙科学奨励賞選考のお手伝いをさせていただいていますが、毎年、優秀な若手研究者によるすばらしい業績に出会うことができている。この賞は、まさに、20 代後半から 30 代前半の若手研究者の宇宙科学研究における創意・工夫に光をあてるものです。この点だけでも、宇宙科学振興会は宇宙科学振興に大いなる貢献をしてきていると言えましょう。そして、宇宙科学振興会が、今後ますます、優秀な若手研究者の育成に貢献することを願ってやみません。

# 宇宙科学振興会創立 30 周年にあたって

常務理事 小野田 淳次郎



宇宙科学振興会は今年創立 30 年を迎えました。この間、宇宙科学の振興に向けて、宇宙科学に関する事業への援助と研究助成を続けることができましたことは、関係各方面の方々のご支援と、当振興会を牽引されてきた先達のご尽力の賜物と、感謝申し上げます。

公益財団法人となった当財団は、その目的達成のために三件の公益目的事業と数件の一般助成を行っています。公益目的事業の筆頭に位置付けている事業が宇宙科学奨励賞顕彰事業です。これは「宇宙科学（宇宙理学、宇宙工学）の分野で優れた研究成果を挙げ、将来宇宙科学を推進する中心となる者と期待される若い研究者を顕彰し、宇宙科学分野の進展に寄与すること」を目的とするものです。理事長の言葉を借りれば「この上は望みようが無いほどのメンバーを集めた」宇宙科学奨励賞選考委員会による綿密な審査を経て、宇宙理学、宇宙工学各一名に宇宙科学奨励賞を授与しています。受賞者は既に 20 名を超え、宇宙科学の多方面の最前線で活躍されています。私としてはこれが宇宙科学の登竜門に当たると評価されるようになることを願っています。そのためは、まず、優れた研究者を皆さまから幅広く御推薦いただくようお願いいたします。また、若手を対象とした賞の評価は、受賞された方々のその後の活躍にも大きく依存するものと考えます。受賞された方々の更なるご活躍を期待しています。

公益目的事業の二つ目は、国際学会出席旅費支援事業です。これは、宇宙科学分野で独創的、先駆的研究活動を行っている若手研究者と、大学や研究機関を退職後も活発な研究活動を行っているシニア研究者に、海外で開催される国際学会に出席する費用の支援を行う事業です。支援の実績は本小冊子にも記載されていますが、研究助成審査委員会による評価を経て、毎年 10 名

程度への支援を目指しています。近年旅費支援事業への応募が急増したことは、嬉しいことではありますが、採択率が低下する結果となり、何らかの対応の必要を感じています。

公益目的事業の三つ目は、国際学会開催支援事業です。宇宙科学分野の国際学会、研究集会を日本国内で開催する組織、団体を毎年 4 件程度支援するものです。旅費支援事業も開催支援事業も毎年 2 回ホームページや学会誌等を通じて広く募集し、研究助成審査委員会での審査を経て採択しています。但し今年度上期に関しては、従来通りに審査、採択はしたものの、コロナウイルス禍の中、学会などの中止、延期、リモート化が相次ぎ、全件取り下げと言う異常事態になっています。国際学会のあり方がこれを機に今後変わるようであれば、支援の新しい在り方も考えて行く必要があると考えています。これらの三つの公益目的事業の成否は審査委員会の見識ある評価に依るところが大きく、大変なご苦勞をおかけしている選考・審査委員各位のご尽力に感謝申し上げます。

現在、当財団の事務局は、いずれも非常勤の佐々木事務局長と専門の異なる 2 名の職員で切り盛りしています。何れも優秀で、常務理事の置物以上の役割が必要となることはまずありません。しかしそれゆえ、事務局メンバーの誰が欠けても当財団の日々の運営は窮地を迎えます。常務理事としては事務局の皆さんの健康を祈るばかりです。

代表理事をはじめとし、事務局と一体となって当財団の目的達成に向けて微力ながら邁進したいと存じます。皆さま方の益々のご理解とご支援をお願い申し上げます。

# 創立30周年を迎えて

運営委員会委員長 安達 昌紀



財団法人宇宙科学振興会の創立満30周年を迎え、心よりお祝い申し上げます。財団設立当初より関わられてきた皆様の中において、はなはだ役不足ではございますが一言お祝いの言葉を述べさせていただきます。

日本電気株式会社は本財団の設立当初より参画し、初代理事長を関本忠弘が、初代常務理事を黒田隆二がそれぞれ務めさせて頂きました。彼らのはるか後輩である私は、2016年度より運営委員会委員長及び評議員を担当させて頂いております。創立以来のお話については諸先輩方にお任せするとしまして、私からは運営委員会の雰囲気をご様にお伝えしたいと思います。運営委員会とは、事務局長を中心に事務局が作成した種々の実行計画について、評議員会や理事会にお諮りする前に、様々な観点でチェックをし、よりよい計画とする活動です。事務局長や運営委員の皆様だけではなく理事長、常務理事、顧問も参加され、実務実行面から大所高所の視点まで、様々な角度からの喧々諤々本音の議論がなされます。その内容は、単純、直接に実行作業の改良を議論するものではなく、本来の活動目的である宇宙科学関連の研究者を支援・鼓舞し、研究者団体には次代を支える研究者を輩出する機会を与えるために我々は何ができるのか、に立ち返り、先輩も後輩も関係なしの議論がなされるのです。サラリーマン生活も30年を過ぎますと、時に「大勢に影響なければ」「予

定調和にもメリット」などと自分が楽をする言い訳ばかりが身につけているわけですが、ここは違います。時に、宇宙科学奨励賞を筆頭とした助成支援事業に関して審査の大まかな経緯についてご披露頂くことがあります。既にその道のビッグネームに到達されている選考委員、審査委員の先生方自ら、なんとまじめに、真摯に、細かく議論されているかに驚きを禁じえません。私事で恐縮ですが、日本電気に入社してほどなく科学衛星の開発に携わることになり、垣間見る研究者の皆さんの厳しくもきらきらした雰囲気に羨望のまなざしを送っていたことを思い出しました。諸先輩方が現役の研究者だった時から半世紀近くを経て、宇宙科学の研究者やその周辺事情は良くも悪くもずいぶん変わってきているはずですが、それを選ぶ方は何一つ変わる気はないのです。それは研究者としての魂、プライドは変わらない、変わるべきではないとの思い、さらに言えば、綿々と続いてきた先人たちへのリスペクトがあるのではないかと勝手に推察しています。財団創立以来30年間変わらずに宇宙科学の振興に向き合ってきた諸先輩方、関係者の皆様に敬意を表するとともに、今後も長きにわたり本財団がその役目を果たし続けること、財団が応援する宇宙科学が未踏の果てへ歩み続けることを祈念して私のお祝いの言葉とさせていただきます。

# 宇宙科学奨励賞を受賞して

宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所 教授 津田 雄一



財団法人宇宙科学振興会が創設30周年を迎えられたこと、心よりお祝い申し上げます。

私は、2012年の第5回宇宙科学奨励賞を「ソーラーセイルによる深宇宙探査・航行技術の実証的研究」という題目で受賞させていただきました。JAXA 相模原にて開発され2010年に打ち上げられた小型ソーラー電力セイル実証機 IKAROS の成功と、そこから引き出された研究成果を評価いただいたものです。

この受賞は、私の「宇宙科学研究者」兼「宇宙科学ミッション遂行者」としてのキャリアにとって、とても大きく背中を押していただくものでした。宇宙科学研究と宇宙科学ミッションは、まったく不可分で一心同体のはずですが、昨今はミッション遂行と研究は別物と扱われ過ぎる風潮もあり、研究者がミッションを遂行する意味、ミッション遂行者が研究を行う意味を問われることもままあります。

この受賞で嬉しかったのは、本受賞自体は学術的成果を評価いただいたものですが、授賞式で声をかけていただいた諸先輩方に、目に見えない努力や論文に現れない泥臭い労苦をたくさん褒めていただいたことです。宇宙科学を牽引してきた当振興会の諸先輩方に成果に至る“プロセス”を評価いただいたことが、私にとっての何よりの誇りとなりました。

私はその後、縁があり現在進行中の小惑星探査機「はやぶさ2」を牽引する役目を担っております。「はやぶさ2」は人類未踏

の小惑星リュウグウに2018～19年の間滞在し、①小型探査ロボットによる小天体表面の移動探査、②複数の探査ロボットの小天体上への投下・展開、③天体着陸精度60cmの実現、④人工クレーター作成とその過程・前後の詳細観測、⑤同一天体2地点への着陸、⑥地球圏外の天体の地下物質へのアクセス、⑦最小・複数の小天体周回人工衛星の実現の7つの工学上の世界初を成し遂げました。科学的にも、リュウグウの意外な素性を次々と明らかにしておるところです。

この「はやぶさ2」の大きな成果は、「はやぶさ」初号機はもちろんのこと、「おおすみ」以来脈々と続いてきた、我が国の宇宙開発黎明期を支えた諸先輩方の積み重ねてきたものの上に成り立っています。「はやぶさ2」に関わることで知り得た宇宙科学の重厚な歴史に、厳粛な敬意を払わないではいられません。

宇宙科学奨励賞の受賞時に、とある先生に「この賞の受賞は、宇宙科学にもっと貢献せよという意味だぞ」と冗談めかして言われたことを記憶しております。この「はやぶさ2」の成果が、宇宙科学への恩返しになっていればと願っているのですが、その程度でお前は何を言っておるか叱咤しそうな先輩方の顔がたくさん思い浮かびます。思い浮かばなくなるまで、引き続き自分のことを一所懸命頑張っていく所存です。

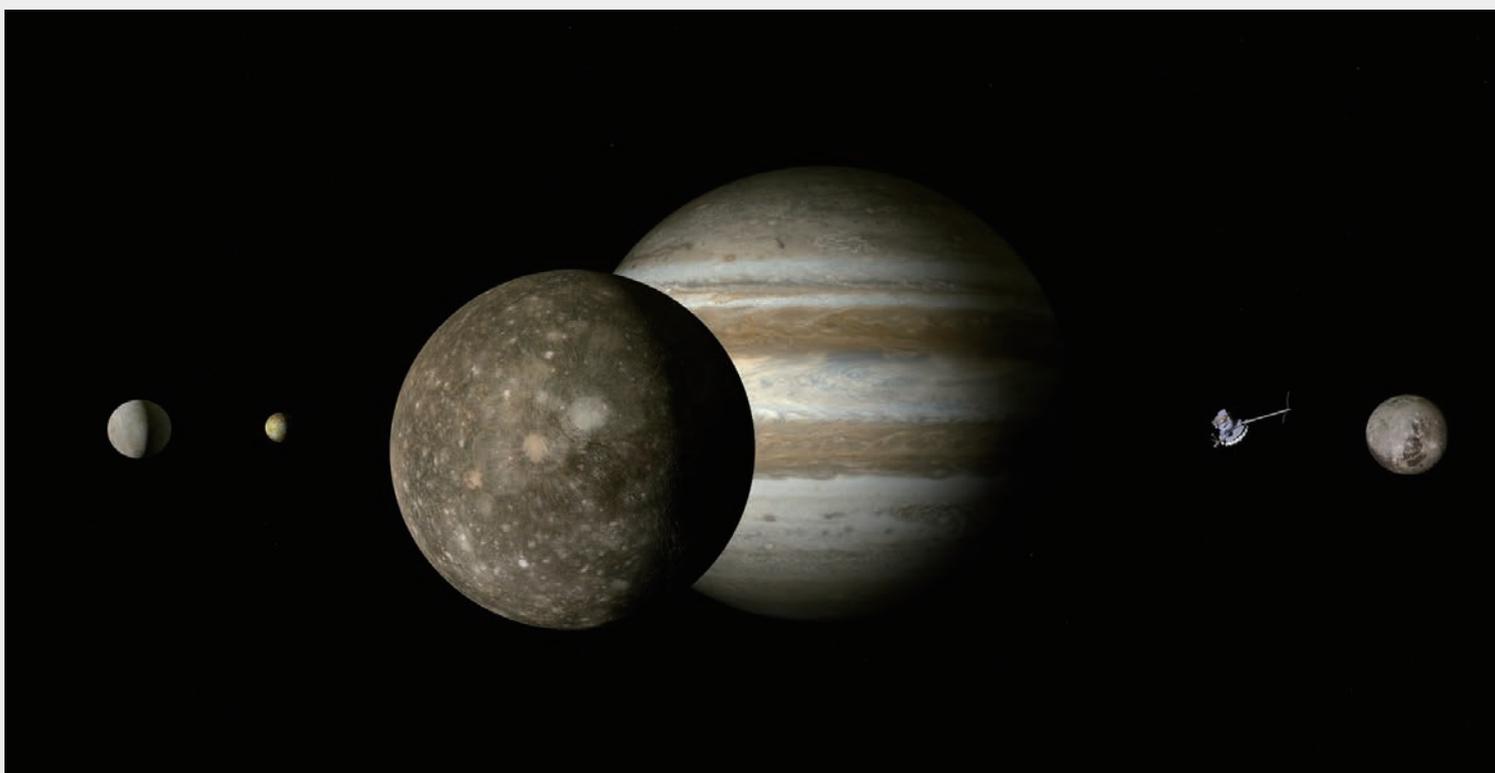
# 事務局長を仰せつかって

事務局長 佐々木 進



宇宙研を退職後は、学校の子供達への授業をしたり関連するホームページを作ったりして比較的のんびりと過ごしてきましたが、5年前のある日当時の常務理事兼事務局長の長瀬先生から、財団の事務局長をやるかというお話をいただきました。昔から頼まれればあまり深く考えず「はい、いいですよ」と引き受ける軽々しいところがあるせいで、お引き受けすることになりましたが、その後長瀬先生から業務を引き継いでいくにつれ、その多岐にわたる仕事のずしりとした重さがわかってきました。宇宙研ではプロジェクトを担当することがありましたが、プロジェクトを担当するということは、プロジェクトの進行管理からお客さんのスリッパを揃えることまで、結局必要なことはなんでもやるということでした。財団の事務局長の仕事はこれに似ていると観念し、若い宇宙科学研究者をサポートするというやりがいのある仕事として取り組んでいる日々です。幸いにも会計担当と庶務担当の2名の事務職員の方々はとても優秀で、経験の少ない事務局長でもとんでもない間違いはやらずに済んでいます。財団の看板事業である宇宙科学奨励賞は、公募から授賞式にいたるまでたくさんの事務仕事がありますが、選ばれた方々はその時点での宇宙科学の最先端を走っている独特のオーラに輝いており、毎回授賞式のお世話をするのが楽しみとなっています。海外での学会参加の旅費支援も重要な助成事業です。この助成を受けた方々からは財団のホームページに掲載用の学会参加報告書を頂いていますが、これを読

むのが非常に楽しみで、はるか昔の若い時代に初めて外国での学会に出席した時の感慨が鮮やかに蘇ります。若い時に国際学会で発表することの高揚感と緊張感は、今も昔もあまり変わらないものなのですね。ということで、楽しいことも多いのですが、楽しんでばかりはいられない状況もあります。それは財団の財政事情です。財団の運営資金の主なものは、設立当時各方面から寄付でいただいた財産の債券投資による利息なのですが、5年くらい前から超低金利時代に入り、数年前からは収支が赤字基調となってしまっています。この状態が続くと財産が減少して財団の目的である助成事業に支障が出てきます。これを回避するには、寄付などの収入をふやす必要がありますが、今のご時世では、なかなか難しい状況です。思い切ってリスクは大きいですが利息のよい投資に手を出すか（実際には公益財団としては難しい）、助成の規模を小さくするか（これは財団としての存在意義にかかわる）、収益事業に手を出すか（武士の商法で赤字になるかも）等々、一見八方塞がりの状況です。幸いにも、財団の役員や委員会の方々には、宇宙科学やその周辺で、不可能を可能にした強者がたくさんいらっしゃるのので、知恵を拝借して、なんとか難局を打開していきたいと思っています。



# 01 概要・沿革

## 公益財団法人 宇宙科学振興会の概要

**名称** 公益財団法人 宇宙科学振興会

**所管** 内閣府（一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律（平成18年法律第50号）第44条の規定に基づく公益財団法人）

**目的** 宇宙科学（宇宙理学、宇宙工学を含む）に関する事業への援助及び研究助成等を行い、もって宇宙科学の進展に寄与することにより、宇宙に対する人類の理解を深めることに貢献することを目的とする。

**事業**

1. 宇宙科学に関する研究の支援
2. 優れた宇宙科学に関する研究業績の顕彰
3. 宇宙科学に関する知識の啓蒙及び普及
4. その他この法人の目的を達成するために必要な事業

## 沿革

1945年（昭和20年）	4月19日（財）東京大学航空研究所奨学会設立
1946年（昭和21年）	1月29日（財）理工学奨学会に名称変更
1959年（昭和34年）	10月20日（財）航空学奨学会に名称変更
1990年（平成2年）	6月19日（財）宇宙科学振興会創立（航空学奨学会を改組）
2012年（平成24年）	4月1日 公益財団法人宇宙科学振興会（財団法人から公益財団法人に移行）

## 基本財産

447,965,448円（2020年3月31日現在）

## 出捐企業・団体

(50音順)(出捐当時の名称)

株式会社朝日工業社	大成建設株式会社	株式会社間組
石川島播磨重工業株式会社	株式会社竹中工務店	株式会社日立製作所
神奈川県	中部電力株式会社	株式会社富士銀行
株式会社神内電機製作所	千代田計装株式会社	フジタ工業株式会社
川崎重工業株式会社	東京電力株式会社	富士通株式会社
川崎製鉄株式会社	株式会社東芝	松下通信工業株式会社
関西電力株式会社	東北電力株式会社	丸由工材株式会社
九州電力株式会社	東洋通信機株式会社	三鷹光器株式会社
経塚工業株式会社	飛鳥建設株式会社	三井物産株式会社
空研工業株式会社	中田建設株式会社	三菱商事株式会社
株式会社熊谷組	日油技研工業株式会社	三菱重工業株式会社
国際ビルサービス株式会社	日産自動車株式会社	三菱電機株式会社
相模原市	日本酸素株式会社	三菱プレジジョン株式会社
清水建設株式会社	日本電気株式会社	明星電気株式会社
昭和飛行機工業株式会社	日本飛行機株式会社	株式会社ユアサコーポレーション
未廣屋電気株式会社	株式会社日本エレクトロニクス	株式会社ユアテック
住友重機械工業株式会社	日本電子計算機株式会社	株式会社横浜銀行
株式会社銭高組	日本油脂株式会社	計 53 法人

## 賛助会員

(2020年3月31日現在)

株式会社 IHI	富士通株式会社
株式会社 IHI エアロスペース	三鷹光器株式会社
川崎重工業株式会社	三菱重工業株式会社
日油株式会社	三菱電機株式会社
日油技研工業株式会社	明星電気株式会社
日本電気株式会社	計 12 法人
日本飛行機株式会社	

# 02 助成・支援事業

## 宇宙科学奨励賞

公益財団法人宇宙科学振興会では宇宙理学・宇宙工学の分野で優れた研究業績をあげ、将来宇宙科学を推進する中心となるものと期待される若い研究者を顕彰し、宇宙科学分野の進展に寄与することを目的とした宇宙科学奨励賞事業を2008年度から始めました。この事業では関係学会を通じて候補者の推薦依頼を行い、宇宙科学各分野の研究者に、近年著しい成果を挙げている37歳以下(大学院卒業後約10年間を目途とするとの趣旨)の若手研究者を推薦していただきます。寄せられた推薦に基き、各分野の有識者で構成された選考委員会によって候補者の審査・選考を行います。選考委員会では原則として宇宙理学分野から1名、宇宙工学分野から1名の候補者を選出し、理事会はその選考委員会の推薦に基づいて当該年度の授賞者を決定します。3月の定例理事会の後に、当該年度の宇宙科学奨励賞受賞者の表彰式及び受賞記念講演会を行います。また、表彰式終了後には、当財団の事業推進を支援いただき運営に協力いただいている関係各界に対するお礼を兼ねて、受賞者をお祝いする会を開きます。2008年度の第1回の授賞以来、2019年度までに理工合わせて21の方が授賞され、受賞者は各方面でご活躍されています。

### 第1回(2008年度)宇宙科学奨励賞受賞者



#### 宇宙理学分野

自然科学研究機構国立天文台 助教

勝川 行雄 氏

業績の題目

「ようこう」・「ひので」による  
太陽電磁流体现象の観測的研究



#### 宇宙工学分野

名古屋大学大学院工学研究科  
宇宙航空工学専攻 講師

長野 方星 氏

業績の題目

宇宙機の先進的熱制御デバイスの  
研究開発

### 第2回(2009年度)宇宙科学奨励賞受賞者



#### 宇宙理学分野

名古屋大学  
太陽地球環境研究所 研究員

宮下 幸長 氏

業績の題目

衛星データに基づいた地球磁気圏における  
サブストームに関する実証的研究



#### 宇宙工学分野

京都大学生存圏研究所  
ミッション専攻 研究員

坂東 麻衣 氏

業績の題目

惑星間航行・地球周回編隊飛行のため  
の最適軌道制御理論の構築

### 第3回(2010年度)宇宙科学奨励賞受賞者



宇宙理学分野

名古屋大学理学研究科 素粒子宇宙物理学専攻 GCOE 研究員

石原 大助 氏

業績の題目

「あかり」衛星による中間赤外線全天サーベイ

### 第4回(2011年度)宇宙科学奨励賞受賞者



宇宙理学分野

理化学研究所  
基礎科学特別研究員

勝田 哲氏

業績の題目

X線による超新星残骸の観測的研究



宇宙工学分野

宇宙航空研究開発機構  
宇宙科学研究所 助教

小林 大輔氏

業績の題目

宇宙機用LSIの動作を阻害する放射線パルスノイズの解明とモデル化

### 第5回(2012年度)宇宙科学奨励賞受賞者



宇宙理学分野

米国 SLAC 国立加速器研究所  
スタンフォード大学 パノフスキーフェロー

内山 泰伸氏

業績の題目

科学衛星を用いたX線、ガンマ線観測による宇宙線加速の研究



宇宙工学分野

(独)宇宙航空研究開発機構  
宇宙科学研究所 助教

津田 雄一氏

業績の題目

ソーラーセイルによる深宇宙探査・航行技術の実証的研究

### 第6回(2013年度)宇宙科学奨励賞受賞者



宇宙理学分野

金沢大学理工研究域 准教授

米徳 大輔氏

業績の題目

飛翔体搭載ガンマ線偏光検出器の開発とガンマ線バーストの放射機構の研究

## 第7回(2014年度)宇宙科学奨励賞受賞者



### 宇宙理学分野

(独)宇宙航空研究開発機構  
宇宙科学研究所 宇宙航空プロジェクト研究員

吉岡 和夫 氏

業績の題目

極端紫外光を用いた惑星圏の  
観測的研究



### 宇宙工学分野

(独)宇宙航空研究開発機構  
宇宙科学研究所 助教

山田 和彦 氏

業績の題目

柔軟構造による再突入飛行体の  
研究開発

## 第8回(2015年度)宇宙科学奨励賞受賞者



### 宇宙理学分野

NASA ゴダードスペースフライトセンター 研究員、メリーランド大学カレッジパーク校 助教(兼任)

山口 弘悦 氏

業績の題目

「すざく」衛星を用いた Ia 型超新星の起源解明と、宇宙における非平衡プラズマ物理学の開拓

## 第9回(2016年度)宇宙科学奨励賞受賞者



### 宇宙理学分野

国立天文台チリ観測所 特任助教

岡本 丈典 氏

業績の題目

飛行体観測による太陽大気波動の研究



### 宇宙工学分野

九州大学大学院  
総合理工学研究院 助教

安養寺 正之 氏

業績の題目

火星大気風洞および関連計測技術の開発  
と低レイノルズ数領域における圧縮性効果  
の解明

## 第10回(2017年度)宇宙科学奨励賞受賞者



### 宇宙理学分野

京都大学白眉センター 特定准教授

榎戸 輝揚 氏

業績の題目

超強磁場中性子星マグネターに関する研究：観測上の多様な振舞いの統一理解と将来観測実験の推進



### 宇宙工学分野

横浜国立大学大学院  
工学研究院 准教授

北村 圭一 氏

業績の題目

衝撃波を安定にとらえる流体計算法の提案とそれを用いたイプシロンロケットの空力特性の解明

## 第11回(2018年度)宇宙科学奨励賞受賞者



### 宇宙理学分野

東京大学大学院理学系研究科 准教授

笠原 慧 氏

業績の題目

ERG衛星の観測による波動粒子相互作用の実証と脈動オーロラの機序解明



### 宇宙工学分野

宇宙航空研究開発機構  
宇宙科学研究所 助教

佐藤 泰貴 氏

業績の題目

宇宙用大型膜の微細な変形特性を考慮した収納・展張に関する研究

## 第12回(2019年度)宇宙科学奨励賞受賞者



### 宇宙理学分野

新潟大学 研究推進機構  
超域学術院 助教(JSPS卓越研究員)

下西 隆 氏

業績の題目

あかり衛星を用いた低重元素量系外銀河における原始星と星間物質の研究



### 宇宙工学分野

宇宙航空研究開発機構  
宇宙科学研究所 プロジェクト研究員

菊地 翔太 氏

業績の題目

小天体近傍の強摂動環境における軌道・姿勢力学理論の構築

## 若手・シニア国際学会出席旅費支援

この事業は1997年度に創設されました。当初は宇宙理学及び宇宙工学に関する独創的・先駆的な研究活動を行っている、35歳以下の優れた若手研究者に対して国際学会に出席する費用の支援を行ってまいりました。2006年度からは、大学及び研究機関などを退職後も、活発な研究を行っておられるシニアの研究者の方に対しても、支援を行なっています。この事業は、当初年3回応募締め切りを設定していましたが、2013年度以降は年2回の応募締め切りとしています。旅費支援を申請した書類は当財団の研究助成審査委員会において採否が審査されます。1997年以降2019年度までの23年間の国際学会出席の支援者の総数は262名となっています。これまでの年度毎の国際学会出席旅費支援者一覧を以下に示します。なお2006年度以降の支援者の報告書は財団のホームページに掲載しています。

### 1997年度～2019年度 国際学会出席旅費支援者一覧

#### 1997 1998 1999

橋本 樹明 宇宙科学研究所宇宙探査工学研究系 助教授	田中 秀和 東京工業大学理学部 助手	浅井 佳子 名古屋大学大学院理学研究科 博士課程3年
佐藤 哲也 宇宙科学研究所宇宙推進研究系 助手	山川 宏 宇宙科学研究所システム研究系 助手	曾 忠 東北大学金属材料研究所 博士課程3年
澤井 秀次郎 宇宙科学研究所システム研究系 助手	能見 公博 東北大学大学院工学研究科 博士課程3年	片山 晴善 大阪大学大学院理学研究科 修士課程2年
斎藤 新 山形大学理学部 修士課程2年	菊池 政雄 北海道大学大学院工学研究科 博士課程3年	白石 裕之 名古屋大学工学研究科 助手
松本 千穂 東京大学大学院理学系研究科 博士課程1年	芥川 智行 北海道大学電子科学研究科 助手	三好 由純 東北大学大学院理学研究科 博士課程2年
趙 孟佑 九州工業大学工学部 講師	佐鳥 新 北海道工業大学応用電子工学科 講師	長沢 真樹子 東京工業大学大学院理工学研究科 博士課程2年
施 紅輝 名古屋工業大学機械工学科 講師	小野瀬 直美 東京大学大学院理学系研究科 博士課程3年	北園 幸一 宇宙科学研究所宇宙輸送研究系 助手
下村 卓 大阪大学大学院基礎工学研究科 助手	福田 盛介 東京大学大学院工学系研究科 博士課程2年	秋山 幸子 総合研究大学院大学数物科学研究科 博士課程2年
川田 光伸 宇宙科学研究所宇宙圏研究系 助手	石田 学 宇宙科学研究所宇宙圏研究系 助手	小澤 秀樹 東京大学大学院研究科 博士課程3年
下条 圭美 総合研究大学院大学数物科学研究科 博士課程3年	柴田 亮 学習院大学大学院自然科学研究科 博士課程2年	矢野 創 宇宙科学研究所惑星研究系 助手
	成田 誠 立教大学理論物理学研究室 研究生	
	廣谷 幸一 国立天文台電波天文学研究系 COE 研究員	
	岩永 則城	
	李 昌禧 東京大学工学系研究科航空宇宙工学科 助手	
	吉田 敬 東京工業大学大学院理工学研究科 博士課程2年	
	谷水 雅治 名古屋大学大学院理学研究科 博士課程1年	

#### 2000 2001 2002

城間 直司 筑波大学機能工学系 助手	高橋 英則 科学技術振興事業団 計算科学技術研究員	中嶋 大輔 九州大学大学院理学府地球惑星科学 博士課程2年
日景 隆 北海道大学大学院工学研究科 電子情報工学専攻 助手	井原 亜紀史 東京大学大学院理学系研究科 博士課程2年	上田 義勝 京都大学宇宙電波科学研究センター 博士課程4年
小澤 拓 国立極地研究所 COE 特別研究員	中村 雅夫 京都大学宇宙電波科学研究センター COE 研究員	前田 良知 宇宙科学研究所宇宙圏研究系 助手
劉 玉付 科学技術庁金属材料技術研究所 総理府技官	中村 圭子 神戸大学自然科学研究科 博士課程2年	宮部 友博 東北大学大学院工学研究科航空宇宙工学 博士課程2年
伊藤 元雄 東京工業大学大学院理工学研究科 地球惑星科学専攻 非常勤研究員	船木 一幸 筑波大学機能工学系 講師	安部 航 東京大学大学院理学系研究科物理学 博士課程3年
山岡 和貴 東京大学大学院理学系研究科 博士課程3年	古屋 泉 神戸大学大学院自然科学研究科 博士課程2年	寺田 直樹 名古屋大学太陽地球環境研究所 協力研究員
新船 幸二 早稲田大学理工学部 助手	諸岡 倫子 宇宙科学研究所向井研究室 研究員	高田 拓 名古屋大学大学院理学研究科 太陽地球相関理学 博士課程2年
谷川 享行 名古屋大学大学院理学研究科 博士課程2年	坂村 芳孝 富山県立大学工学部 講師	何 斐 室蘭工業大学大学院工学研究科 博士課程1年
白井 仁人 名古屋大学太陽地球環境研究所 助手	海田 博司 国立極地研究所南極隕石研究センター 助手	小川 佳子 東京大学地震研究所 特別研究員
橋 省吾 東京大学大学院理学系研究科 日本学術振興会特別研究員	家田 章正 宇宙科学研究所太陽系プラズマ研究系 学術振興会特別研究員 PD	石村 康生 北海道大学大学院工学研究科 助手
安達 和彦 神戸大学工学部機械工学科 助手		杵淵 紀世志 東京大学大学院工学系研究科 修士課程2年

## 2003

長野 方星 慶応義塾大学大学院理工学研究科  
日本学術振興会特別研究員

野呂 文人 千葉大学理学部物理学科 博士課程 1年

永島 一秀 東京工業大学理工学研究科 流動研究員

奥平 恭子 総合研究大学院大学数物科学研究所  
博士課程 1年

徐 庸鉄 東京大学社会基盤工学専攻 博士課程 2年

上田 佳宏 宇宙科学研究所 助手

千葉 一永 東北大学大学院工学研究科 博士課程 2年

田村 隆幸 宇宙科学研究所 助手

澤田 弘崇 東京工業大学理工学研究科 博士課程 3年

湊 亮二郎 室蘭工業大学 助手

鈴木 浩治 千葉工業大学工学部機械サイエンス学科  
講師

## 2004

八房 智顕 広島大学大学院工学研究科 助手

荒井 武彦 総合研究大学院大学物理科学研究科  
博士課程 2年

浅井 歩 京都大学大学院理学研究科付属天文台  
博士課程 3年

丸 祐介 東京大学大学院工学系研究科 博士課程 2年

並木 雅章 大阪大学大学院理学研究科 教務補佐員

山本 直嗣 九州大学大学院総合理工学研究院 助手

村島 未生 東京大学大学院理学系研究科 博士課程 2年

多田 興平 中央大学大学院理工学研究科 博士課程 4年

栗原 純一 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部  
宇宙航空プロジェクト研究員

鹿野 良平 国立天文台太陽天体プラズマ研究部  
上級研究員

寺島 雄一 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部  
宇宙航空プロジェクト研究員

山崎 了 大阪大学大学院理学研究科 学振PD

中村 琢磨 東京工業大学理工学研究科 博士課程 1年

本田 親寿 九州大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻  
博士課程 3年

山田 真保 東京大学大学院理学系研究科  
地球惑星科学専攻 博士課程 3年

## 2005

北里 宏平 東京大学大学院理学系研究科 博士課程 1年

吹場 活佳 総合研究大学院大学物理科学研究科  
宇宙科学専攻 博士課程 3年

山本 高行 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部  
共同研究員

灰野 禎一 高エネルギー加速器研究機構  
超伝導低温工学センター 研究員

西山 和孝 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部  
宇宙輸送工学研究系 助手

永井 大樹 東北大学大学院工学研究科  
航空宇宙工学専攻 助手

桜井 毅司 埼玉大学大学院理工学研究科  
博士後期課程 3年

小林 浩 名古屋大学環境学研究科 研究員

原田 雄司 東京大学大学院理学系研究科  
地球惑星科学専攻 博士課程 2年

近江 俊輔 東北大学大学院工学研究科  
航空宇宙工学専攻 博士課程前期課程 2年

秋田 剛 大阪府立大学大学院工学研究科  
航空宇宙海洋系専攻 助手

諸田 智克 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部  
固体惑星科学研究系 プロジェクト研究員

## 2006

..... シニア .....

小山 孝一郎 首都大学東京科学技術大学 客員教授  
(元宇宙科学研究本部宇宙プラズマ研究系教授)

..... 若手 .....

嶋宮 民安 山梨大学総合分析実験センター 助手

小泉 宜子 東京大学大学院理学系研究科 博士課程 5年

小澤 俊平 首都大学東京システムデザイン学部 研究員

小田 靖久 東京大学大学院新領域創成科学研究科  
博士課程 2年

木村 淳 東京大学地震研究所 博士特別研究員

山本 征生 東京大学大学院理学系研究科  
研究機関研究員

永田 健太郎 東京大学大学院理学系研究科  
博士課程 2年

小平 聡 早稲田大学理工学総合研究センター 助手

飯塚 浩二郎 中央大学理工学部電気電子情報通信工学科  
教育技術員

松井 信 東京大学大学院工学系研究科  
日本学術振興会特別研究員 PD

堤 誠司 JAXA 情報・計算工学センター 招聘研究員

鴨川 仁 東京学芸大学教育学部物理学科 助手

河合 宗司 JAXA 情報・計算工学センター 招聘研究員

関 克隆 東京大学大学院理学系研究科  
博士課程 2年

## 2007

..... シニア .....

市川 行和 宇宙科学研究所 名誉教授

桜井 邦朋 早稲田大学理工学術院 理学博士

森岡 昭 東北大学大学院理学研究科  
教育研究支援者 理学博士

..... 若手 .....

小柳 潤 JAXA 宇宙科学研究本部 助教

松田 淳 名古屋大学大学院工学研究科 助教

荻 芳郎 総合研究大学院大学物理科学研究科  
博士課程 5年

亀田 真吾 JAXA 宇宙科学研究本部 プロジェクト研究員

齊藤 実穂 東京大学大学院 博士課程 3年

小林 大輔 JAXA 宇宙科学研究本部  
宇宙探査工学研究系 助手

勝川 行雄 自然科学研究機構国立天文台 助教

今田 晋亮 大学共同利用機関法人自然科学研究機構  
国立天文台 ひので科学プロジェクト研究員

星野 晶夫 首都大学東京大学院理工学研究科  
博士課程 2年

菊池 聡 山形大学大学院理工学研究科  
博士後期課程 2年

仙場 淳彦 名古屋大学大学院情報科学研究科 助教

萩野 正興 京都大学大学院理学研究科付属天文台  
機関研究員

伊藤 正一 北海道大学大学院理学研究院自然史科学部門  
特任助手

元屋敷 靖子 JAXA 宇宙科学研究本部佐藤研究室 助手

神尾 精 国立天文台 ひので科学プロジェクト研究員

佐藤 理江 JAXA 宇宙科学研究本部 プロジェクト研究員

岡田 陽子 JAXA 宇宙科学研究本部 プロジェクト研究員

中川 友進 青山学院大学理工学研究科  
日本学術振興会特別研究員 (PD)

萩原 利士成 東京大学大学院理学系研究科 博士課程 1年

## 2008

..... シニア .....

上杉 邦憲 宇宙航空研究開発機構 名誉教授

横野 文命 宇宙科学研究所 名誉教授

..... 若手 .....

増井 博一 九州工業大学工学研究院  
電気電子工学研究系 博士研究員

長谷川 洋 JAXA 宇宙科学研究本部 助教

芦田 宏樹 東京工業大学大学院  
機械宇宙システム専攻 修士課程 2年

中宮 賢樹 総合研究大学院大学 物理科学研究科

三樹 裕也 九州大学大学院工学府航空宇宙工学専攻  
博士課程 1年

石坂 圭吾 富山県立大学工学部 講師

各務 聡 九州工業大学工学研究院 助教

牧野 高紘 総合研究大学院大学物理科学研究科  
5年一貫博士課程 5年

養島 敬 名古屋大学太陽地球環境研究所  
GEMSIS 研究員

渡邊 恭子 JAXA 宇宙科学研究本部  
プロジェクト研究員

# 2009 2010 2011

- ..... シニア .....
- 秋葉 鏡二郎 東京大学 名誉教授  
三浦 公亮 東京大学 名誉教授
- ..... 若手 .....
- 辻 裕司 名古屋大学理学研究科 博士課程後期 2年  
鈴木 朋憲 東北大学大学院理学研究科地球物理学専攻 博士後期課程 2年  
深川 美里 大阪大学大学院理学研究科 宇宙地球科学専攻 助教  
勝身 俊之 総合研究大学院大学物理科学研究科 宇宙科学専攻 博士課程 5年次(5年一貫制)  
高橋 岳志 京都大学大学院工学研究科航空宇宙工学専攻推進工学分野 博士後期課程 2年  
加藤 雄人 東北大学大学院理学研究科 地球物理学専攻 助教  
寺田 幸功 埼玉大学理工学研究科 准教授  
村上 豪 東京大学大学院理学系研究科 博士課程 2年  
早津 佳那子 早稲田大学先進理工学研究科 物理学及応用物理学専攻 博士課程後期 1年  
渡邊 皓子 京都大学大学院理学研究科付属天文台 博士後期課程 1年  
松岡 健 筑波大学大学院システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻笠原研究室 博士後期課程 1年  
永田 洋久 JAXA 宇宙航空プロジェクト研究員  
江端 新吾 北海道大学理学研究科 自然科学学部門 博士研究員

- ..... シニア .....
- 高野 忠 日本大学総合科学研究所理工学部情報工学科  
五家 建夫 (元)宇宙航空研究開発機構研究開発本部 宇宙環境グループ
- ..... 若手 .....
- 上道 茜 筑波大学大学院システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士後期課程 1年  
山崎 政彦 日本大学大学院理工学研究科航空宇宙工学専攻 博士後期課程 3年  
前田 慎市 筑波大学大学院システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士後期課程 2年  
黒田 剛史 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所 日本学術振興会特別研究員  
山本 南海子 マサチューセッツ工科大学航空宇宙工学部 博士課程  
荒尾 与史彦 早稲田大学理工学部 助教  
金田 さやか 京都大学工学研究科 日本学術振興会特別研究員  
小野田 忍 独立行政法人日本原子力研究開発機構 研究員  
吉岡 和夫 立教大学理工学部 学術振興会 PD 研究員  
新堀 淳樹 京都大学生存圏研究所 特定研究員  
三浦 均 東北大学大学院理学研究科地学専攻 助教  
北村 圭一 宇宙航空研究開発機構情報・計算工学センター プロジェクト研究員

- ..... 若手 .....
- 佐藤 真一郎 独立行政法人日本原子力研究開発機構 研究員  
小郷原 一智 宇宙科学研究所 研究員  
川手 朋子 京都大学理学研究科 博士課程  
森澤 征一郎 東北大学流体科学研究所 博士課程後期 2年  
佐藤 泰貴 東京工業大学大学院総合理工学研究科 博士後期課程 2年  
三谷 友彦 京都大学生存圏研究所 助教  
小路 真史 京都大学生存圏研究所 博士課程後期 3年  
米澤 宏一 大阪大学大学院基礎工学研究科機能創成専攻 助教  
中山 久広 筑波大学大学院システム情報工学研究科 博士後期課程 2年  
小高 裕和 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所 宇宙航空プロジェクト研究員  
嶋村 耕平 東京大学大学院新領域創成研究科 博士後期課程 1年

# 2012 2013 2014

- ..... シニア .....
- 尾崎 洋二 東京大学名誉教授 長崎大学名誉教授  
菊池 崇 京都大学生存圏研究所 非常勤講師  
山下 雅道 宇宙航空研究開発機構 名誉教授
- ..... 若手 .....
- 石原 智明 東北大学大学院工学研究科航空宇宙工学専攻 博士課程前期 2年  
長崎 陽 京都大学生存圏研究所 修士課程 2年  
埜 千尋 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所 宇宙航空プロジェクト研究員  
笠原 慧 宇宙科学研究所太陽系科学研究系 助教  
福成 雅史 東京大学大学院 博士課程 1年  
北川 幸樹 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所 助教  
和田 豊 秋田大学工学資源学研究科 助教  
丹羽 佳人 国立天文台 研究員

- ..... シニア .....
- 鶴飼 正行 愛媛大学名誉教授
- ..... 若手 .....
- 石田 祥子 明治大学先端数理科学インスティテュート 研究員  
荻原 正博 名古屋大学大学院理学研究科 博士研究員  
中田 大将 室蘭工業大学航空宇宙機システム研究センター 特任助教  
中川 広務 東北大学大学院理学研究科地球物理学専攻 助教  
伊藤 海太 東京大学マテリアル工学専攻 助教  
大野 翔也 名古屋大学大学院工学研究科 航空宇宙工学専攻 修士課程 2年  
清水 達生 九州工業大学宇宙環境技術ラボラトリー 博士研究員  
福守 孝哉 東京大学新領域創成科学研究科 日本学術振興会特別研究員

- ..... シニア .....
- 松岡 勝 理化学研究所
- ..... 若手 .....
- 久保田 勇希 東京理科大学基礎工学部材料工学科 博士研究員  
荻野 要介 東北大学大学院工学研究科航空宇宙工学専攻 助教  
岡本 丈典 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所 宇宙航空プロジェクト研究員  
河口 優子 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所 宇宙航空プロジェクト研究員  
月崎 竜童 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所 助教  
金川 哲也 筑波大学システム情報系 助教  
長谷川 浩司 工学院大学 助教  
赤松 弘規 SRON Netherlands Institute for Space Research 日本学術振興会海外特別研究員  
大平 豊 青山学院大学理工学部物理数理学科 助教  
ヤン チェホン 宇宙航空研究開発機構 日本学術振興会海外特別研究員

## [ 国際学会出席旅費支援を受けた研究者が参加した学会の例 ]



2016年4月  
International Venus Conference 2016



2017年5月  
JOINT HINODE-11/IRIS-8 SCIENCE MEETING

# 2015

# 2016

# 2017

..... 若手 .....

松本 琢磨 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所  
プロジェクト研究員

飯田 佑輔 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所  
プロジェクト研究員

戸部 裕史 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所 助教

保井 みなみ 神戸大学大学院理学研究科  
地球惑星科学専攻 助教

李 東輝 東京大学大学院工学系研究科  
航空宇宙工学専攻 博士課程 2年

北村 成寿 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所  
宇宙航空プロジェクト研究員

萩野 浩一 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所  
東京大学 博士課程 3年

Soken 宇宙航空研究開発機構  
Halil Ersin プロジェクト研究員

..... 若手 .....

加藤 伸祐 名古屋大学環境学研究科地球環境科学専攻  
博士課程 2年

田中 康平 総合研究大学院大学物理科学科  
宇宙科学専攻 博士課程 3年

安藤 紘基 京都産業大学理学部 研究員

栗田 怜 名古屋大学宇宙地球環境研究所  
日本学術振興会特別研究員

川嶋 嶺 東京大学大学院工学系研究科 助教

高木 聖子 東海大学情報技術センター 特定研究員

..... 若手 .....

飯島 陽久 名古屋大学宇宙地球環境研究所 研究員

疋田 伶奈 東京大学大学院理学系研究科  
地球惑星科学専攻 修士課程 2年

浅川 純 東京大学大学院工学系研究科  
航空宇宙工学専攻小泉研究室 博士課程 2年

岩川 輝 名古屋大学大学院工学系研究科航空宇宙工学専攻  
空力・推進講座 衝撃波・宇宙推進研究グループ 講師

増田 紘士 東京大学大学院工学系研究科  
マテリアル工学専攻 博士課程 3年  
宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所佐藤研究室

大塚 啓介 東北大学工学研究科航空宇宙工学専攻模原研究室  
博士課程 2年

和地 瞭良 東京大学工学系研究科航空宇宙工学専攻  
修士課程 2年

# 2018

# 2019

..... シニア .....

加藤 學 宇宙航空研究開発機構 名誉教授

..... 若手 .....

野村 麗子 宇宙航空研究開発機構  
宇宙航空プロジェクト研究員

宇野 健太郎 東北大学大学院 修士課程 2年

川端 洋 千葉工業大学大学院 博士課程後期 3年

佐藤 慎太郎 東北大学大学院 博士課程後期 3年課程 2年

小財 正義 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所  
研究開発員

後藤 啓介 名古屋大学大学院工学研究科  
航空宇宙工学専攻 博士課程 1年

..... シニア .....

井上 一 明星大学理工学部 常勤教授

牧島 一夫 東京大学カブリ数物連携宇宙研究機構  
連携研究員

..... 若手 .....

宮田 喜久子 名古屋大学大学院工学研究科 助教

永田 貴之 東北大学 博士後期課程 2年

小澤 晃平 国立大学法人九州工業大学 助教

高尾 勇輝 東京大学大学院工学系研究科  
航空宇宙工学専攻 博士課程 3年

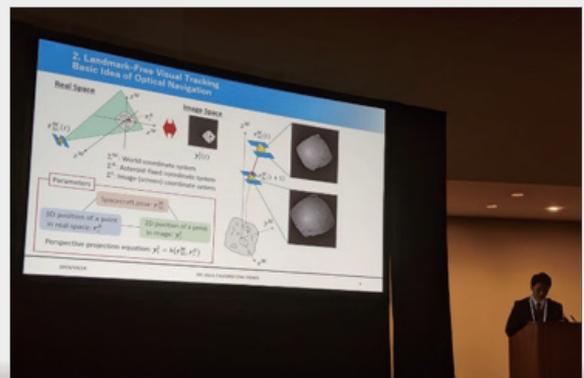
赤嶺 政仁 東京大学大学院工学系研究科  
航空宇宙工学専攻 助教

生松 聡 京都大学大学院理学研究科  
地球惑星科学専攻太陽惑星系電磁気学講座  
博士後期課程 3年

## [ 国際学会出席旅費支援を受けた研究者が参加した学会の例 ]



2018年9月  
11th International Symposium on Special Topics  
in Chemical Propulsion & Energetic Materials



2019年10月  
70th International Astronautical Congress

## 宇宙科学に関する国際学会開催支援

宇宙科学分野（宇宙理学、宇宙工学を含む）の国際学会の日本国内での開催を主催する組織・団体に対する支援・助成は当財団創設（1990年）当初より行われてきました。ただし、当初宇宙科学分野の国際学会の主催は宇宙科学研究所の研究者が行うことが多かったため、全国公募ではなく宇宙科学研究所（宇宙研）内部の研究者または衛星プロジェクトなどで宇宙研と共同研究を進めている各大学の研究者が応募の対象となっていました。その後この助成事業に対し全国的に関心が高まってきたことを受け、2007年度よりこれを宇宙研の衛星事業に限らず、全国の研究機関・大学において宇宙科学に関する国際学会を主催する場合には応募できるように、全国の研究機関・大学を対象とした公募型事業に発展させてきています。当初は申請を随時受け付けていましたが、2013年以降は年2回の応募締め切りとしています。1990年度より2019年度までの30年間に90件の国際学会に対し支援を行ってきました。これら支援した国際学会の一覧を以下に示します。なお、2007年以降の支援については、その開催報告書を財団のホームページに掲載しています。

### 1990年度～2019年度国際学会開催支援一覧

1990年 11月	第10回 宇宙科学関係機関連絡協議会 (IACG 総会)
1991年 10月	第11回 宇宙科学関係機関連絡協議会 (IACG 総会)
1992年 12月	アジア太平洋国際宇宙年会議
12月	「ワールド・スペース・Congress」展示会
1993年 11月	鹿児島宇宙空間観測所開設30周年記念式典
1994年 4月	国際天文学アカデミー
1996年 3月	X線天文学国際シンポジウム
4月	国際天文学アカデミー
8月	国際宇宙大学 (ISU) への研究者派遣
10月	国際会議「Diffuse Infrared Radiation and the IRT」
10月	国際月探査ワークショップ
1997年 1月	国際天文学アカデミー
12月	宇宙科学将来計画検討会
1998年 6月	第32回宇宙空間科学 COSPAR 総会
1999年 5月	国際会議「ダストプラズマの物理」
10月	国際会議「太陽及び宇宙空間プラズマの爆発現象」

2000年 4月	Mid-&Far-Infrared Astronomy and Future Space Missions
5月	低コスト惑星ミッション
2001年 9月	BepiColombo Science Workshop
10月	国際金星ワークショップ
12月	Astro-E2によるX線観測計画会議
2002年 5月	しし座流星雨国際科学シンポジウム
7月	アジア太平洋地区高エネルギー宇宙物理学会議
7月	COSPAR Colloquium「磁気圏プラズマ物理学の最先端」
2003年 7月	第28回宇宙線国際会議
2004年 10月	サンプルリターンが拓く太陽系始原天体の科学
2005年 3月	Astro-E2 科学観測研究会
10月	宇宙科学日中共同研究ワークショップ
10月	低コスト惑星探査ミッションについての国際会議
2006年 5月	電離圏研究と利用の将来
7月	平成18年度第2回はやぶさ国際学会シンポジウム
11月	ジオスペース探査に向けたプラズマ粒子観測の技術革新と国際協調
12月	国際学会「X線衛星すざく」で解明する極限宇宙
2007年 2月	第1回札幌冬季国際宇宙医学シンポジウム2007
2月	極限環境における衝撃波形成国際ワークショップ
3月	宇宙線と高エネルギー宇宙
7月	第17回アストロダイナミクスシンポジウム
9月	第7回化学推進の特別な話題にかかわる国際シンポジウム
10月	第3回宇宙利用の科学に関する国際会議
12月	国際会議「VSOP-2での天体物理学と技術：マイクロ秒角の解像度にせまる」
2008年 2月	地震前駆現象に関する国際ワークショップ
3月	宇宙線科学の発展
6月	第26回宇宙技術および科学の国際シンポジウム
7月	第26回国際希薄気体力学シンポジウム
7月	第18回アストロダイナミクスシンポジウム
11月	JUSTSAP 科学・技術・宇宙応用に関する日米会議
2009年 2月	第1回「あかり」国際研究集会
4月	高エネルギー観測機器較正のための国際天文学協会研究会
7月	第27回宇宙技術および科学の国際シンポジウムつくば大会
11月	国際標準電離層委員会

2010年 5月	Material Circulation in the Early Solar System
7月	降着現象を伴う近接連星系の物理
8月	国際宇宙航行アカデミー 50周年記念シンポジウム
9月	第8回日中韓微小重力科学ワークショップ
10月	第5回アルフベン会議
10月	第9回宇宙用半導体素子放射線影響 国際ワークショップ
11月	全天 X 線監視装置 MAXI: 初年度の成果
2011年 6月	第10回 宇宙環境からの材料保護に関する国際会議
9月	非一様で有限な磁気圏システムでの物理過程に関する研究会－玉尾共鳴結合理論 50年
11月	2011年 PERC 惑星地質学フィールドシンポジウム
11月	エネルギー物質とその応用に関する国際会議
11月	第6回国際大気リム観測会議
2012年 4月	第23回スペーステラヘルツ技術国際シンポジウム 2012年
5月	第13回環太平洋国際宇宙会議
5月	小惑星、彗星、流星に関する国際会議 2012
10月	第4回超小型衛星シンポジウム
2013年 6月	次世代赤外線天文衛星 SPICA 国際科学会議 2013
11月	第18回国際レーザ測距ワークショップ
2014年 2月	すざく - MAXI 国際研究会
7月	第2回生命の起原アストロバイオロジー国際学会 - バイオアストロノミー合同大会
8月	Cosmic Dust
11月	第二回 UNISEC 世界大会
2015年 5月	国際宇宙放射線重粒子線治療シンポジウム 2015
7月	第34回国際電気推進会議
9月	第6回宇宙物理学国際シンポジウムおよび宇宙および地上応用を目指した気液二相システムに関する国際会議
11月	GNSS 国際シンポジウム 2015 IS-GNSS 2015
2016年 10月	国際スペースワイヤカンファレンス 2016
12月	MAXI の七年間の連続観測
2017年 2月	太陽系科学シンポジウム 2017
7月	第31回国際衝撃波シンポジウム
7月	第17回低温検出器国際ワークショップ
9月	雷と静電気に関する国際会議
10月	第4回「あかり」国際会議
2018年 5月	9th Workshop on Catastrophic Disruption Workshop in the Solar System
6月	第15回衛星帯電技術国際会議

2018年11月

国際天文学連合シンポジウム第341回：次世代観測装置による全波長銀河モデリングの挑戦

2019年2月

ISEE 国際シンポジウム「未踏領域の直接探査による太陽圏研究の新展開」

5月

高エネルギー天文学校正国際コンソーシアム会議

7月

第39回 地球科学・リモートセンシング国際シンポジウム2019

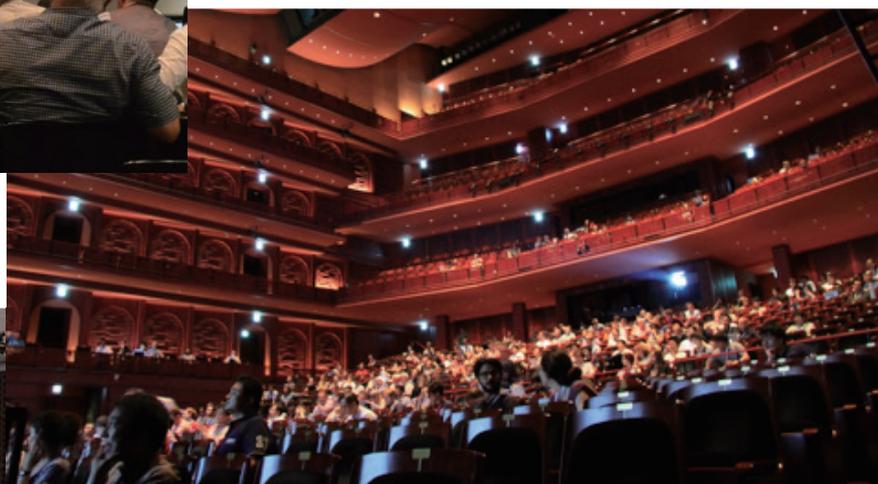
12月

第3回 ムーンビレッジ国際ワークショップ・シンポジウム

[ 国際学会開催支援を受けた国際学会の例 ]



2016年10月  
国際スペースワイヤカンファレンス2016



2017年7月  
第17回低温検出器国際ワークショップ



2018年6月  
第15回衛星帯電技術国際会議



2019年12月  
第3回ムーンビレッジ国際ワークショップ・シンポジウム

## 宇宙科学に関する一般支援助成

一般支援助成の目的は、広く一般国民に対して宇宙科学に関する知識を普及するとともに、若手青少年の宇宙科学に関する興味・関心を深め、宇宙科学の将来の発展に寄与することです。本助成は一般国民、青少年を対象に同様の目的で活動する他団体と連携して行います。本助成は他の組織・団体が企画・運営の中心になっている事業への支援であるため、公益財団法人への移行後は管理費（法人会計）から支出することとしています。公益財団法人として発足した2012年度以降に一般支援を行なった支援先を以下に示します。

### 2012年度～2019年度一般支援先一覧

※助成内容	※支援先
<b>2012年度</b>	
2012年度 JAXA 相模原キャンパス特別公開 2012年7月27日、28日	宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所
第11回 君が作る宇宙ミッション 2012年8月6日～10日	宇宙航空研究開発機構 宇宙教育センター
第22回 モデルロケット全国大会 2012年10月6日	日本モデルロケット協会
第20回 衛星設計コンテスト 2012年11月10日	一般財団法人日本宇宙フォーラム
<b>2013年度</b>	
第29回宇宙技術および科学の国際シンポジウム ISTS 2013年6月2日～9日	一般社団法人日本航空宇宙学会
2013年度 JAXA 相模原キャンパス特別公開 2013年7月26日、27日	宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所
第12回 君が作る宇宙ミッション 2013年8月5日～9日	宇宙航空研究開発機構 宇宙教育センター
第23回 モデルロケット全国大会 2013年10月5日	日本モデルロケット協会
第21回 衛星設計コンテスト 2013年11月9日	一般財団法人日本宇宙フォーラム
<b>2014年度</b>	
2014年度 JAXA 相模原キャンパス特別公開 2014年7月25日、26日	宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所
第13回 君が作る宇宙ミッション 2014年8月4日～8日	宇宙航空研究開発機構 宇宙教育センター
第24回 モデルロケット全国大会 2014年11月1日	日本モデルロケット協会
第22回 衛星設計コンテスト 2014年11月8日	一般財団法人日本宇宙フォーラム
<b>2015年度</b>	
第30回 宇宙技術及び科学の国際シンポジウム ISTS 2015年7月4日～10日	一般社団法人日本航空宇宙学会
2015年度 JAXA 相模原キャンパス特別公開 2015年7月24日、25日	宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所
第11回 能代宇宙イベント 2015年8月13日～21日	一般社団法人あきた宇宙コンソーシアム

第 27 回 モデルロケット全国大会 2015 年 10 月 3 日

日本モデルロケット協会

第 23 回 衛星設計コンテスト 2015 年 11 月 4 日

一般財団法人日本宇宙フォーラム

## 2016 年度

2016 年度 JAXA 相模原キャンパス特別公開 2016 年 7 月 29 日、30 日

宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所

第 12 回 能代宇宙イベント 2016 年 8 月 18 日～26 日

一般社団法人あきた宇宙コンソーシアム

第 29 回 モデルロケット全国大会 2016 年 10 月 22 日

日本モデルロケット協会

第 24 回 衛星設計コンテスト 2016 年 11 月 12 日

一般財団法人日本宇宙フォーラム

## 2017 年度

ロクトサイエンスレクチャー 2017 年 5 月 20 日

多摩六都科学館との共催

第 31 回 宇宙技術および科学の国際シンポジウム ISTS 2017 年 6 月 3 日～9 日

一般社団法人日本航空宇宙学会

第 16 回 君が作る宇宙ミッション 2017 年 7 月 31 日～8 月 4 日

宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所

第 13 回 能代宇宙イベント 2017 年 8 月 17 日～24 日

一般社団法人あきた宇宙コンソーシアム

2017 年度 JAXA 相模原キャンパス特別公開 2017 年 8 月 25 日、26 日

宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所

第 31 回 モデルロケット全国大会 2017 年 10 月 21 日

日本モデルロケット協会

第 25 回 衛星設計コンテスト 2017 年 11 月 4 日

一般財団法人日本宇宙フォーラム

## 2018 年度

ロクトサイエンスレクチャー 2018 年 6 月 2 日、6 月 9 日

多摩六都科学館との共催

第 17 回 君が作る宇宙ミッション 2018 年 7 月 30 日～8 月 3 日

宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所

第 14 回 能代宇宙イベント 2018 年 8 月 16 日～22 日

一般社団法人あきた宇宙コンソーシアム

2018 年度 JAXA 相模原キャンパス特別公開 2018 年 7 月 27 日、28 日

宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所

第 33 回 モデルロケット全国大会 2018 年 10 月 20 日

日本モデルロケット協会

第 26 回 衛星設計コンテスト 2018 年 10 月 27 日

一般財団法人日本宇宙フォーラム

## 2019 年度

ロクトサイエンスレクチャー 2019 年 6 月 1 日、6 月 29 日

多摩六都科学館との共催

第 32 回 宇宙技術および科学の国際シンポジウム ISTS 2019 年 6 月 15 日～21 日

一般社団法人日本航空宇宙学会

第 18 回 君が作る宇宙ミッション 2019 年 7 月 29 日～8 月 2 日

宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所

第 15 回 能代宇宙イベント 2019 年 8 月 17 日～23 日

一般社団法人あきた宇宙コンソーシアム

2019 年度 JAXA 相模原キャンパス特別公開 2019 年 11 月 9 日

宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所

第 35 回 モデルロケット全国大会 2019 年 10 月 19 日

日本モデルロケット協会

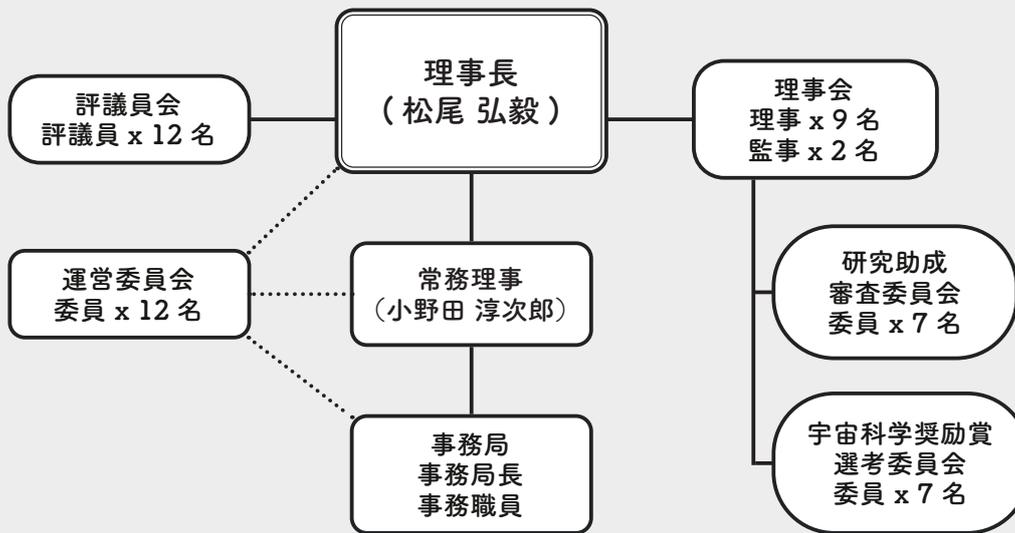
第 27 回 衛星設計コンテスト 2019 年 11 月 9 日

一般財団法人日本宇宙フォーラム

# 03 財団の現在の組織

(2020年6月10日 現在)

## 組織図



## 役員（理事・監事）名簿

### 理事長

松尾 弘毅

宇宙科学研究所 名誉教授

### 理事

小野田 淳次郎

宇宙航空研究開発機構 名誉教授

安部 隆士

宇宙航空研究開発機構 名誉教授

久保田 弘敏

帝京大学工学部 客員教授

清水 潔

TMI 総合法律事務所 弁護士

高柳 雄一

多摩六都科学館 館長

長瀬 文昭

宇宙航空研究開発機構 名誉教授

牧島 一夫

東京大学 名誉教授

向井 利典

宇宙航空研究開発機構 名誉教授

### 監事

小川原 嘉明

宇宙科学研究所 名誉教授

野村 隆

公認会計士

## 評議員会名簿

### 評議員会長

森尾 稔                      ソニー株式会社   社友

### 評議員

安達 昌紀                      日本電気株式会社 社会基盤ビジネスユニット   上席主幹  
五十嵐 巖                      三菱重工業株式会社 防衛・宇宙セグメント   宇宙事業部 営業部長  
大島 丈治                      三菱電機株式会社 宇宙システム事業部・副事業部長   兼   宇宙営業第二部長  
國中 均                      宇宙航空研究開発機構   宇宙科学研究所   所長  
小林 康徳                      宇宙科学研究所   名誉教授  
白敷 利和                      富士通株式会社 テクニカルコンピューティングソリューション事業本部   TC 統括営業部長  
常田 佐久                      自然科学研究機構   国立天文台   台長  
中村 卓司                      情報・システム研究機構   国立極地研究所   所長  
中村 陽一郎                      株式会社 IHI エアロスペース   営業部   次長  
並木 文春                      株式会社 IHI   理事   航空・宇宙・防衛事業領域   宇宙開発事業推進部長  
西田 篤弘                      宇宙科学研究所   名誉教授

## 研究助成審査委員会名簿

### 委員長

加藤 學                      宇宙航空研究開発機構   名誉教授

### 委員

石井 信明                      宇宙航空研究開発機構   宇宙科学研究所   教授  
石川 隆司                      名古屋大学   ナショナルコンポジットセンター   特任教授  
荻田 丈士                      中部大学   工学部宇宙航空理工学科   教授  
常深 博                      大阪大学大学院   理学研究科   名誉教授  
廣瀬 和之                      宇宙航空研究開発機構   宇宙科学研究所   教授  
星野 真弘                      東京大学大学院   理学系研究科   研究科長   教授

## 宇宙科学奨励賞選考委員会名簿

### 委員長

井上 一 宇宙航空研究開発機構 名誉教授

### 委員

尾中 敬 明星大学 常勤教授  
小野田 淳次郎 宇宙航空研究開発機構 名誉教授  
土屋 和雄 京都大学 名誉教授  
中谷 一郎 宇宙航空研究開発機構 名誉教授  
藤井 良一 大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 機構長  
山本 哲生 北海道大学 名誉教授

## 運営委員会名簿

### 委員長

安達 昌紀 日本電気株式会社 社会基盤ビジネスユニット 上席主幹

### 委員

安部 隆士 宇宙航空研究開発機構 名誉教授  
小野田 淳次郎 宇宙航空研究開発機構 名誉教授 財団常務理事  
栗林 一彦 宇宙航空研究開発機構 名誉教授 千葉工業大学 客員教授  
佐々木 進 宇宙航空研究開発機構 名誉教授 財団事務局長  
志佐 陽 株式会社IHI 航空宇宙事業本部 宇宙開発事業推進部 事業企画グループ部長  
中村 陽一郎 株式会社IHIエアロスペース 営業部 次長  
八田 博志 東京工科大学 客員教授  
三好 寛 宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所 科学推進部部長  
宗村 高明 日本電気株式会社 宇宙・防衛営業本部 第一宇宙営業部 営業課長  
村上 浩 宇宙航空研究開発機構 チーフエンジニア室 相模原独立評価チーム 客員  
吉田 哲也 宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所 研究総主幹 学際科学研究系 教授

## 顧問名簿

西村 純 東京大学 名誉教授  
鶴田 浩一郎 宇宙科学研究所 名誉教授

## 歴代理事長・常務理事・事務局長一覧

### 理事長

関本 忠弘 1990年 6月 19日～2000年 6月 18日  
↓  
武井 俊文 2000年 6月 19日～2012年 3月 31日  
↓  
松尾 弘毅 2012年 4月 1日～

### 常務理事

黒田 隆二 1999年 6月 19日～2000年 6月 18日  
↓  
西村 純 2000年 6月 19日～2008年 6月 18日  
↓  
鶴田 浩一郎 2008年 6月 19日～2012年 3月 31日  
↓  
長瀬 文昭 2012年 4月 1日～2017年 6月 16日  
↓  
小野田 淳次郎 2017年 6月 17日～

### 事務局長

余米 賢三 1990年 6月 19日～1992年 3月 31日  
↓  
山本 俊助 1992年 4月 1日～1992年 7月 31日  
↓  
上原 昇 1992年 8月 1日～1996年 12月 31日  
↓  
田岡 良一 1997年 4月 1日～2002年 3月 31日  
↓  
西村 純（併任） 2002年 4月 1日～2003年 3月 31日  
↓  
飯塚 千秋 2003年 4月 1日～2003年 9月 15日  
↓  
西村 純（併任） 2003年 9月 16日～2008年 1月 7日  
↓  
長瀬 文昭（併任） 2008年 1月 8日～2016年 3月 31日  
↓  
佐々木 進 2016年 4月 1日～



## 公益財団法人 宇宙科学振興会

神奈川県相模原市中央区由野台 3-1-1 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所内

TEL : 042-751-1126 FAX : 042-751-2165

URL : <http://www.spss.or.jp> E-mail : [admin@spss.or.jp](mailto:admin@spss.or.jp)